

「八・二〇を教訓に」

広島県 呉市立片山中学校 3年 久富木 彩乃

まさか、広島でこんな災害が起こるとは…。

私だけでなく、広島で暮らす誰もがそう思ったのではないのでしょうか。77 人もの犠牲者を出した広島市の土砂災害の発生から2年が経過しました。犠牲者の追悼式では、遺族の代表の方が、「日頃の防災意識を高め、同じ悲劇を繰り返さないことが一番の慰霊になる。」とおっしゃっていました。教訓を再確認する日にしようと、広島各地で様々な取り組みが行われました。

私たちが通う片山中学校でも、今年の8月20日に、地域協働プロジェクト八・二〇として地域避難訓練を行いました。地域の自治会の方々や消防署・警察署の方々と協力して、中学生が地区ごとに分かれ、自分が住んでいる地域の地域の方の家に行き、

「おはようございます。私たちは片山中学校のものです。危険ですから、避難場所まで避難しましょう。」と声をかけ、避難経路が安全かどうか確認しながら避難しました。地域の方の様子を見ながら、必要であれば、手や肩を貸したり、歩く速さを合わせたりして、安全に避難するためにはどうすればよいか相手の立場になって考え、相手を思いやりながら避難誘導をしました。

私は、避難した後、避難所の受付係を体験しました。

「体調はいかがですか。怪我はしていませんか。ご家族の方は無事ですか。」

と、避難所の不安な気持ちを少しでも和らげるように、暗い顔ではなく、笑顔で接するよう心がけました。また、先生に負傷者の役をしていただき、車椅子利用者の介助の練習をしました。段差があるところでは、「段差があるので、斜めになりますよ。」

と声かけしたり、ゆっくり押したり、スロープのところでは、車椅子利用者の身体を支えるなど、安全に介助するためにはどのようにすればよいか考えながら、実際に練習することができました。

こうした地域避難訓練などの地域活動を増やして、地域の絆がしっかりしていけば、いざという時の信頼感や連帯感に繋がるのではないかと思います。

私たちの中学校では、毎年11月を防災月間と題して、各教科で防災に関する授業や講演をしていただき、防災意識を高める活動をしています。例えば、理科では、地震が伝わるまでの速さについて勉強したり、体育では身近な体操服を使って担架に応用して、人を抱える練習をしたりしました。また、この月には、地域総合防災訓練があり、小学校や幼稚園と共同で避難訓練をしたり、地域の方々が炊き出しをしてくれたりします。

私たちは、まず1年生のとき、自分たちの住んでいる地域を、実際に歩いて知るフィールドワークからはじめました。危険を知らせる看板がある場所や急傾斜地があり、崖崩れがおこりそうな場所がたくさんあることが分かりました。このフィールドワークで分かったことをもとにして、防災新聞を作り、地域の方々に配布しました。2年生のときには、避難所の設営をしました。避難場所にダンボールで部屋を仕切り、プライベートな空間を保てるようにしました。その際に、入り口の場所を、周りの部屋の様子を見ながら、どこに設置するか、どのようにすれば快適に過ごせるか考えながら設営しました。

また、片山中学校の取り組みとして、災害時を想定した食料や飲料水の備蓄を実践しています。このような取り組みは、家庭でも実践しておく必要があり、私の家でも飲料水や食料を備蓄したり、非常持ち出し品をリュックにまとめたりしています。そして、もしものことを考えて、家族間で避難場所や連絡手段を話し合っておくことが大事だとわかりました。

土砂災害などの自然災害は起きてほしくないけれど、まさかの事態に備えて、過去と同じ悲劇を繰り返さないために準備しておくことは、とても大切なことだと考えます。私たち中学生も、地域の防災の担い手として行動できるように、これからも防災の知識を身につけ、住んでいる地域に目を向け、地域に関心を持って生活していきたいです。